異国の中の祖国―ブルゲンラント・クロアチア人の過去、現在、未来

三谷惠子(2007 年度スラブ研究センター客員研究員、京都大学人間・環境学研究科)

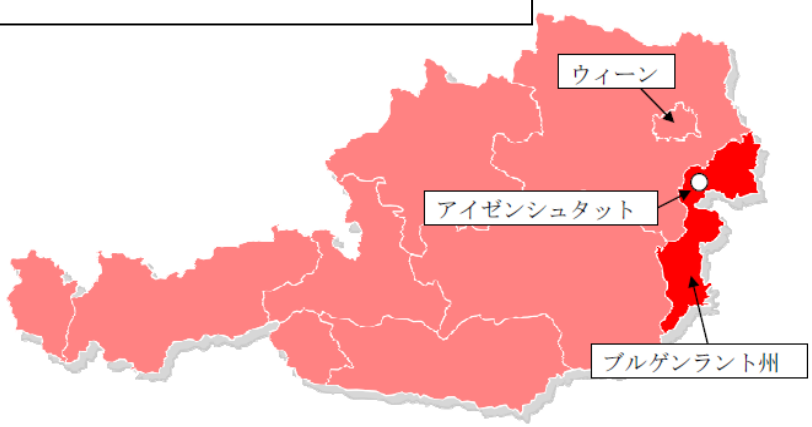
はじめに。

音楽の都として日本人にも馴染みの深いオーストリアの首都ウィーンから南東へ 60 キロほど離れた所に、アイゼンシュタットという町がある。18 世紀の音楽家ハイドンが、ハンガリー屈指の大貴族エステルハージ家に仕えて約 30 年を過ごした地で、かつてのエステルハージ公の館を改装して作られたハイドン記念館は、ウィーンから少し足をのばしてみませんか、という観光案内書にはたいてい紹介されている観光の名所である。観光案内書に紹介されていないのは、アイゼンシュタットを州都とするブルゲンラント州の数奇な歴史、そしてその歴史の陰でひっそりと 400 年以上の間この地に生きて来た少数民族―ブルゲンラント・クロアチア人の存在である。本稿では、東欧という地域の特性を、このブルゲンラント・クロアチア人の過去と現在をとおしてみながら、あわせて民族とは何か、民族のアイデンティティはどのようにして保たれるのか、といった問題について考えていきたい。

1. ブルゲンラント州とブルゲンラント・クロアチア人について。

本題に入る前にあらかじめ、基本的なことがらについて述べておこう。まず、本稿の主たる舞台となるブルゲンラントは、オーストリア最東端の州で、州都はアイゼンシュタット(クロアチア名はジェレズノ「鉄の町」)、現在でこそオーストリア連邦を構成する州だが、もともとハンガリー王国の領域にあり、第一次大戦後に、ハンガリーからオーストリアに移譲された地域である。

【ブルゲンラント州とアイゼンシュタット】



ブルゲンラントという名前は、1919 年、この地の帰属をめぐる議論の中で、「4 つのブルクの地方（das Vierburgenland）」という言い方が用いられたことに由来する。4 つのブルクとはエーデンブルク（現在のショプロン), プレスブルク（ハンガリー名ポジョニ、現ブラティスラヴァ), ヴィーゼルブルク（現モション), アイゼンブルク（現ヴァシヴァール)で、いずれもかつての西ハンガリーの主要都市である。皮肉にもこれらの町は一つとしてブルゲンラント州に含まれなかったが、ブルゲンラントの名称は 1922 年 1 月の第 1 回オーストリア共和国議会で正式に決定された。クロアチア語での名称はグラディシチェ(Gradišće)といい、こちらはブルゲンラントの訳語としてその時に作られたものである。

さて、このブルゲンラント州を中心に、ウィーンの東側、また国境を隔てたハンガリー西部、スロヴァキア西部、さらにはチェコ南部の一帯には、かつて、オスマン帝国のバルカン半島侵攻から逃れてこの辺りに移住した数多くのクロアチア人の村があった。17 世紀から現代に至る歴史の中で、それらのクロアチア人社会の大部分は消滅したが、それでも、今日までクロアチア人としてのアイデンティティを保ち、クロアチア語を用いている人々がわずかながらいる。それが本稿のテーマである「ブルゲンラント・クロアチア人(Burgenländische Kroaten)」、クロアチア語では「グラディシチェのクロアチア人(Gradišćanski Hrvati)」とよばれる人々である。この名称はしたがって、今日その主たる居住地域となっているブルゲンラント州のみならず、隣接する地域や、ウィーンなどに住む歴史的なクロアチア人について広く用いられるもので、この人々をクロアチア本国のクロアチア人と区別する場合にとくに重要である。ただし本稿では、ブルゲンラント・クロアチア人のみを話題とするので、区別する必要がある場合を除き、ブルゲンラント・クロアチア人を単に「クロアチア人」と記述する。

ブルゲンラント・クロアチア人が用いる言語もまた、クロアチア本国の言語と区別する意味で「ブルゲンラント・クロアチア語」(クロアチア語では「グラディシチェのクロアチア語」)とよばれ、現在、ブルゲンラント州の「クロアチア人地区」に指定された 30 の自治体およびウィーンとグラーツの一部の区で、ドイツ語とならぶ公用語とされている。ブルゲンラント・クロアチア語の中にも相当の方言差が存在するが、多くの方言が、現在のクロアチアの海岸部や島部にわずかに残る、チャ方言とよばれる南スラヴ語方言の特徴をもっとも強く示し、スラヴ語の歴史的変化を考察するさいの興味深い手がかりとなっている。また、ブルゲンラント・クロアチア方言の分布は、かれらがどの地方からやってきたかという、移住の軌跡をたどるための“生きた資料”としても貴重である。現在のクロアチア本国の標準語は、シト方言とよばれる異なるタイプの南スラヴ語方言を基盤に 19 世紀に形成された言語であるため、ブルゲンラント・クロアチア語との間には、相互理解を妨げるほどではないにしても、歴然とした差が存在する。

以上のことがらを念頭に、ブルゲンラント・クロアチア人の歴史と現状をたずねていくことにしよう。

2. 過去—移住の始まりから現代まで。

2.1. 移住の理由と移住先。

14 世紀後半からバルカン半島へ進出をはじめたオスマン帝国は、16 世紀のスレイマン 1 世(位 1520-1566)の時代に最盛期を迎えた。そしてその統治のもとバルカン半島ほぼ全土を支配下におき、ヨーロッパへの入り口となるハプスブルク領のすぐ南にまで迫った。歴史上有名な 1526 年のモハーチの戦い、1529 年のウィーン包囲にみられるオスマン帝国の伸張は、中・東欧で勢力を拡張する途上にあったオーストリア・ハプスブルク家にとってのあらたな脅威となり、一方、両勢力に挟まれた地理的空間に住むバルカンの小民族にとっては、生存そのものの危機となった。

15 世紀の末からオスマン軍は現在のクロアチア内にも侵入しはじめ、1493 年にオスマン帝国のバルカン駐留部隊とクロアチア諸公の連合軍の間に起きた戦闘では後者が大敗し、土着のクロアチア貴族の多くが命を落としたといわれる。この戦い自体

は、モハーチの戦いのように歴史上の大事件として世界史に記述されることはないが、同じ年にクロアチアで作られた『ノヴィ第二聖務日課書』とよばれる教会の祈祷書の中に、この戦いについて記した司祭の覚え書きがあり、その言葉使いから、クロアチアの人々にとってオスマン軍の襲来がどれほど恐ろしいものであったかを推測することができる—「(トルコ人たちは)ギリシャ，ブルガリア、ボスニア，アルバニアを占領し、クロアチアの民に襲いかかった(…)キリスト教徒にいくついもの戦をしかけ、クロアチアとスロヴェニアの全土を(…)海に至るまで略奪した。(…)焼き払い、略奪し、神の家を打ち壊し、神の民を、鎖に繋いだまま力ずくで引き連れて行き、自分たちの市場で、家畜をそうするように、売買するのだった。」

このように、悪魔の襲来とも思われたオスマン軍との戦場となったクロアチア、スラヴォニア各地では、16 世紀にはいると、戦闘そのものによる被害のほか、土地の荒廃による食糧難、内陸からダルマチアへ通じる交通路の遮断から生じる物資不足や物価の高騰、飢饉などによって、社会のあらゆる階級の人々が生活に困難を極めるようになった。そうした状況に耐えられなくなった人々が、当初はボスニアやダルマチアから、そしてオスマン軍との戦闘が北上するにつれてクロアチアの北部、沿岸部、また西スラヴォニアから、より安全なすみかを求めて国外へと移住していったのである。

15 世紀末から 16 世紀までの間にクロアチア人が移住した痕跡は、周辺各地にみられる。たとえばイタリア中部、アドリア海側に位置するモリセ地方には、1533 年にクロアチア人が建てた教会が今日も残されており、内陸のカンポバッソ近郊には、500 年前にアドリア海を渡って逃れて来たクロアチア人の子孫たちが、今もわずかながら古いクロアチア語を保持して暮らしている。またオーストリア南部のケルンテン州は、スロヴェニア系住民が多いことで知られているが、この辺りにもクロアチア人が移住した記録が残されている。しかしながら、圧倒的に多かったのは、ハンガリー西部からオーストリア北東部にかけての一帯であった。

ではなぜ、移住先がそこに集中したのだろうか。その理由は、クロアチアと、ハンガリーおよびオーストリアの歴史的関係にある。11 世紀末に民族王を失ったクロアチアはその後、ハンガリー王をクロアチアの君主として戴く「同君連合」の体制を受け入れた。そして南への勢力拡張を狙うハンガリーとの間に妥協的な国家関係を築きながら、実務上の統括者である「総督(バン)」の統率下、土地貴族を中心とする封建社会を発展させていった。やがて 1526 年のモハーチの戦いで若きハンガリー王ラヨシ 2 世が戦死し、王位後継者をめぐってハンガリー王国が分裂する事態に発展すると、クロアチア議会は、金銭や物資の援助を条件に、西ハンガリーで王位を得たハプスブルクのフェルディナント 1 世をクロアチア王として承認し、以後オーストリア・ハプスブルク＝ハンガリーの勢力下に入ったのである。このような歴史的繋がりを考えれば、オスマン帝国の攻撃に直面したクロアチアの中小貴族や農民らが、オーストリアやハンガリーの有力貴族に庇護を求めたのは当然のことといえるだろう。中でも、1500 年代中期にクロアチアの総督の職にあったフェレンツ・バチャーニ、トマシ・ナダーシディといったハンガリーの大貴族は、クロアチアやスラヴォニアにも領地を有しており、これらの領地の人々を積極的に西ハンガリーにある自分の領地に移住させた。フェルディナント王も、クロアチア人の移住を許可し、人々が無事に目的地に移動できるよう配慮するようにという命令書を、周辺の貴族たちに出している。こう

したハンガリー方面への動きが移住の流れを作る中、オーストリア側の領主貴族らも、広い土地や税の免除などの好条件を出して、クロアチア人を自分たちの領地に呼び込んだ。狙いはもちろん労働力、そしていざというときの戦力の強化であった。このようにして 1520 年から 1580 年頃までの約半世紀を中心に 16 世紀全般にわたって、推定 15 万人ほどのクロアチア人が祖国を離れ、今日の地理区分でオーストリア、ハンガリー、さらにはチェコやスロヴァキアにまたがる地帯に移住した。この 15 万人という数は、当時のクロアチア北部、西スラヴォアニア一帯がほとんど無人になるほどであったといわれる。まさに民族の大移住だったのである。

2.2.　消えたクロアチア人たち。

さまざまな資料に基づく歴史研究によれば、17 世紀初頭の時点でクロアチア人の村は、上記の地域に合計 180 ほどあったとされる。しかし今日まで残ったのは、ブルゲンラント州を中心とする 50 ほどの村で、その他の土地、とくにウィーンの東側からスロヴァキアのブラティスラヴァ周辺一帯にかけて点在した 60 余りの村は、歴史の中で完全に消滅した。消滅といっても、文字通り村がなくなったわけではない。他民族との共住の中で、住民たちがクロアチア語を用いることをやめ、それとともにクロアチア人であるという意識を、すくなくとも社会生活上失っていったのである。

ある共同体の文化的変容は、共同体の文化を支える要素—固有の言葉、宗教や生産手段、伝統行事などが他文化との接触や同化で失われ、異なるものに置き換えられることで起こる。これらの要素の中で、言葉はつねに、きわめて重要な位置をしめるといってよいだろう。というのも、言葉は、ふつう人間にとってもっとも日常的で効率的な自己表現と情報伝達の手段であるのみならず、それぞれの共同体が独自の言葉—それを「言語」とよぼうと「方言」とよぼうと—をもっているために、その言葉を用いて何かを語るという行為そのものが、共同体への帰属を表す指標となり、また共同体がそれとして保たれるための求心力となるからである。言葉は単に、社会で使う道具ではなく、社会を作る道具でもある。クロアチア人社会のように、周囲の社会との間に宗教や生活形態上の差がない場合には、とくに、言葉は集団のアイデンティティを支える中心的役割をはたし、逆に言葉の喪失はそのまま、集団のアイデンティティの喪失に直結するのである。

社会言語学では、個人や集団における使用言語の変化を「言語シフト」とよぶ。言語シフトは、ある言語の社会的使用領域が変化し、社会的により力の強い言語が社会活動の広汎な領域で使用されるようになるのに相関して、力の弱い言語—方言や地域言語、少数言語の使用領域が、次第に家庭内などの個人的な使用の範囲に狭められ、やがてそれさえもなくなる、という段階的なプロセスとしてとらえられる。上記の失われたクロアチア人社会の場合、そのプロセスは時代や地域によって一様ではないが、古い時代には、周囲の言語との日常的な接触や、クロアチア語を用いる下級貴族や農民に対する教会・領主貴族層からの圧力が要因となって、言語シフトが生じたと考えられる。また 19 世紀にはいり、ウィーンなどの都市部の工業化と農村の経済悪化が進むと、農民層が都市へ労働者として流出するようになった。ハンガリー側に住む農民たちも、大都市ウィーンに多くの経済活動を依存するようになった。こうした状況が必然的に、小さな農村共同体の中でしか通用しないクロアチア語の使用の可能性を狭めていき、最悪の場合には、完全消滅に至らしめる言語シフトをもたらしたのである。

2.3.　現代史の中で。

第一次世界大戦は、中欧に長く君臨したオーストリア・ハプスブルク＝ハンガリー帝国の解体、そしてチェコスロヴァキアやユーゴスラヴィア(当初はセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国)といった新しい民族国家の誕生という結果を生んだが、ブルゲンラント・クロアチア人にとってそれは、あらたにオーストリア、ハンガリー、そしてチェコスロヴァキアという別々の国にかれらの社会が分断されることを意味していた。

歴史的にクロアチア人が集中して住んでいた西ハンガリー地域、つまり、それまでハンガリーとオーストリアの国境とされたライタ川の東側に位置し、後にブルゲンラント州となる 4 つの県は、第一次大戦後の新秩序の中で最後まで帰属問題が懸案となったが、ドイツ語を話す住民が多いという理由から、最終的に 1921 年のトリアノン条約でオーストリアに帰属することが決定した。大部分のクロアチア人は、オーストリア国民としての道を歩むことになったのである。

ところで、この地域に関しては、ここをチェコスロヴァキアと南スラヴ人の国をつなぐ「スラヴ回廊」としようという案が第一次大戦中にユーゴスラヴィアやチェコの政治家の間で検討された、というエピソードがある。オーストリアとハンガリーにはさまれた狭い帯状の地帯をチェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアで分割統治しようというこの案は、チェコやユーゴスラヴィアでかなり真剣に検討され、結局正式な提案とはされなかったものの、パリ講和会議にチェコの外相ベネシュから提出された覚書の中でも短く言及された。この案はむろん、国際社会からは問題外とされ、「スラヴ回廊」のアイディアについてユーゴスラヴィア関係者と話し合ったと伝えられるチェコの大政治家マサリクも「現実的でない」と著作の中で述べているが、19 世紀以来スラヴ世界に存在する、スラヴ民族が団結しようという汎スラヴ主義や、大国とりわけドイツ人への対抗姿勢といったものがこのようなアイディアを生み出したと考えると、「スラヴ回廊」をめぐるエピソードも、中欧の歴史そしてその地政学的特徴を考える上で興味深いものとなる。いずれにしても、この案の正当性として引き合いに出されたのが、ここにスラヴの同胞であるクロアチア人がいるという事実であった。この地域の帰属をめぐる議論は、歴史の中でひっそり生きて来た民の存在を、国際舞台に引き出す機会ともなったのだった。

さて、ブルゲンラント州の地図を見るとわかるように、ショプロン一帯だけハンガリー領がオーストリア側に突き出した形になっている。ショプロンは、古くから西ハンガリー一帯の中心的都市であったために、トリアノン条約で周辺の県のオーストリアへの帰属が決まる中、ハンガリーの急進勢力がこれに反対して暴動が起きた。これを収めるためにショプロン一帯の帰属は住民投票によって決められることとなり、1921 年 12 月に住民投票が実施された。その結果、ハンガリーにとどまることを希望した住民が 65%と優勢を占め、この一帯だけがハンガリー領となった。ショプロンはこのため、「もっとも忠実なる都市

Civitas Fidelissima」とよばれる名誉を得たが、一方、それまでも少数派だったここに住むクロアチア人たちは、オーストリア側に移譲された地域に住む同胞-―場合によっては親戚たちと隔てられ、さらなる少数派としてハンガリーに残された。

その後オーストリアはドイツとともに、第二次大戦で再び敗戦国となり、1955 年にようやく完全自主独立を回復した。そしてハンガリーは、ソ連ブロックに組みいれられ、1956 年のハンガリー革命の後ほぼ 30 年間にわたって、鉄のカーテンの向こう側に置かれたのである。

1985 年のソ連共産党ゴルバチョフ書記長の登場を契機に、東欧各国では民主化・自由化の動きが進み、1989 年 6 月 27 日、それまで「西」と「東」を隔てるためにオーストリアとハンガリーの間の国境に設けられていた鉄条網が、両国の外相立ち会いのもとに撤去され、両国間の国境が事実上開放された。この出来事は、東欧そして欧州全体のあらたな時代の幕開けの象徴として世界の注目を浴びたが、この鉄条網除去の式典が行われたオーストリア側の国境の村クリンゲンバッハは，クロアチア名をクリンプフという、現在もクロアチア人が住民の 70%以上を占める、歴史的なクロアチア人の居住区である。民主化を求めて人々が立ち上がった 1956 年のハンガリー革命のさいにはハンガリーからの亡命者を真っ先に受け入れたかれらは、その 30 年後には、再び東西の扉が開かれる最初の目撃者となったのだった。

ハンガリーとオーストリア外相による鉄条網の除去式典（1989）（写真は Burgenland 1921-2001（CD-ROM）より転載）

3.　現在―人口、教育、文化活動。

3.1.　「ブルゲンラント・クロアチア人」の数。

前節で述べたように、クロアチア人はかつてのハプスブルク帝国のほぼ中央に移住したが、歴史の変遷の中で、ブルゲンラント以外の地ではほとんどがそれぞれの地に同化し、消え去った。ハンガリーでは、2001 年の国勢調査で、ジェール・モション・ショプロン県とヴァシ県に合計約 4300 人[1]、スロヴァキアでは同じく 2001 年国勢調査でブラティスラヴァの近郊に 450 人ほど[2]のブルゲンラント・クロアチア人がいる。

---

[1] ハンガリーの国勢調査には「クロアチア人」というカテゴリーしかない。しかしハンガリー各地にはいろいろな時期に移住したクロアチア人がいるため、2001 年国政調査結果の中から、歴史的にブルゲンラント・クロアチア人の居住区である上記県のクロアチア人の数を合計した。詳細はhttp://www.nepszamlalas.hu/eng/volumes/18/tables/load3_15.html（ハンガリー統計局資料）

[2] スロヴァキアの国勢調査も「クロアチア人」というカテゴリーしか設けてない。ここでは、歴史的にブルゲンラント・クロアチア人の居住区のあるブラティスラヴァV区のクロアチア人の数に依拠した。詳細はhttp://www.statistics.sk/webdata/slov/scitanie/tab/tab.htm（スロヴァキア統計局資料）

チェコのオーストリア国境に近い南モラヴィアにも、第 2 次大戦時までクロアチア人の村が数箇所あり、合計 2500 人ほどのクロアチア人がいた。かれらは第二次大戦期に、望まずしてナチス党員に登録されたりドイツ軍に徴用されたため、戦後、ナチス協力者とされ、1948 年、チェコスロヴァキア共産党政権によって全世帯が村から追放され、チェコ各地に散り散りに強制移住させられた。チェコの民主化以後、各地に散った南モラヴィアのクロアチア人は、かつての村の一つフリエリシトフ(チェコ名イェヴィショフカ)に集って記念行事を催したり、他のブルゲンラント・クロアチア人社会との交流を行っているが、500 年近く用いられてきた南モラヴィア方言のクロアチア語は、モラヴィアの村で生まれた人々すなわち戦前世代が最後の話者となっており、次の世代以降にこの言葉はもはや継承されていない。第二次大戦後チェコを追われたいわゆるズデーテン・ドイツ人の問題は、チェコの欧州加盟にさいして国際的なメディアでもとりあげられるなど、広く知られる問題であるが、同じような悲劇は、この小さな民族にも及んだのである。

さて、ここからはオーストリア内に話を限定して、クロアチア人とクロアチア語の状況をみていくことにしよう。

まず、クロアチア人の数であるが、表 1 に示すように、ここで「クロアチア人」というのは、国勢調査でクロアチア語(2001 年度の調査ではじめて「ブルゲンラント・クロアチア語」を「クロアチア語」と区別)を「日常語として用いる」と回答した人の数である。オーストリアの国勢調査において日常語とは、家庭内や親しい友人との会話に用いる言語と解釈される。オーストリア国内には、ブルゲンラント・クロアチア人以外に、ハンガリー人、スロヴェニア人、チェコ人、スロヴァキア人など、かつてのハプスブルク帝国を構成していた諸民族が少数民族として今も暮らしているが、国勢調査では、使用言語以外に民族的帰属に関連する調査項目がないために、言語話者の数がしばしば、民族集団の数を判断する材料として用いられる。当然、日常語として、もはやドイツ語しか用いない市民はこれらの少数民族の数に含まれない結果になり、政府の少数民族に対する保護対策に微妙な影響を与えるという問題を含んでいる。

【表 1　クロアチア人の数の推移】[3]

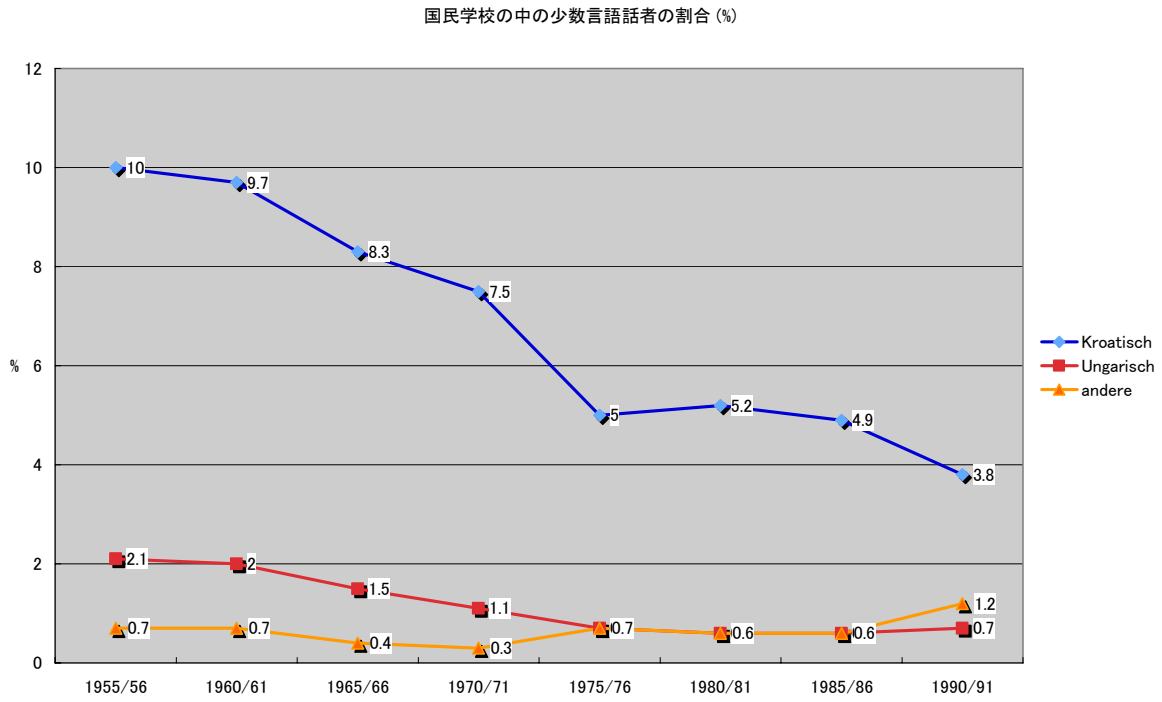
国勢調査年	クロアチア語話者	ブルゲンラント全体人口
1923	42,011	286,179
1934	40,500	299,447
1951	30,599	276,136
1961	28,126	271,001

[3]Božena Vranješ-Šoljan, *Gradišćanski Hrvati. Između tradicije i suvremenosti*. Zagreb:Educa 2005, p.154. 統計はオーストリア統計局http://www.statistik.at/web_de/statistiken/index.html でも見ることができる。2001 年に関しては「ブルゲンラント・クロアチア語」と「クロアチア語」をはじめて区別した調査がされた。これは 1991 年以後、ユーゴ紛争の影響でユーゴスラヴィアからの難民や移住者が増加したための措置と考えられる。したがって 2001 年の欄にあげた数値は「ブルゲンラント・クロアチア語」を日常語とすると答えた数で、「クロアチア語」を日常語と回答した人はは約 1000 名である。

1971	24,526	272,119
1981	18,762	269,771
1991	19,109	270,880
2001	16,334	265,996

表 1 でわかるとおり、クロアチア人の数―クロアチア語を日常語とする人口は確実に減少している。とりわけ、他の多くの少数言語の場合と同じように、若年層での話者が激減しており、今後の存続は危機的状況にある。一般に少数言語話者にとって、幅広い社会活動を行うために、社会における中心的言語の習得は必須だが、それは同時に少数言語の社会的使用領域をいっそう狭め、いずれその言語の消滅を招くことになる。クロアチア人社会もその例外ではなく、前節でも触れたように、ドイツ語社会で生きていくためにドイツ語の使用を優先させる、という言語シフトの現象はすでに、ウィーンなどオーストリア側の経済圏への依存が高まった 19 世紀から始まっていたが、20 世紀になり、とりわけ第二次大戦後の現代社会においては、その傾向は強くなる一方である。また、ドイツ語話者とクロアチア語話者との婚姻によって、家庭でのクロアチア語の使用が困難になったというケースも多くある。次に述べるように、現在ブルゲンラント州では、ブルゲンラント・クロアチア語が授業言語として、また学習言語として取り入れられているが、そうした授業に参加する子供たちの中でさえ、ブルゲンラント・クロアチア語を母語とする児童の割合は年々減少しており、バイリンガル授業を受け持つ教員を悩ませている。ブルゲンラント州内の国民学校全体の中で、クロアチア語母語話者の数はわずかに３％程度である(下のグラフを参照。青色の折れ線が、国民学校の生徒中、クロアチア語を「母語」とする児童の割合である。同じく赤がハンガリー語、オレンジがそのほかの言語を母語とする児童の割合)[4]。

[4] 右のデータをもとに本稿著者がグラフ化した：Martin Ivančić, *Warum nicht? Argumente fuer das zweisprachige Schulwesen*. Eisenstadt: Kroatische Kultur-und Dokumentationszentrum, 1998, p.11.



3.2.　学校教育と言語。

国民の教育を国家が自ら負うべき義務的事業と考える―今日ではあたりまえのようなことがハプスブルク帝国で始まったのは、かのマリア・テレジアの時代であった。この時発布された『教育原理(Ratio Educationis)』以後、ハプスブルク・ハンガリーにおいては幾度か学校法が定められ、国民に教育を義務づける政策が打ち出された。しかし、初等教育はそれぞれの民族の言語で、という原則がおおむね貫かれたために、クロアチア人社会では、地区の教会が学校の機能をはたし、そこに通うことのできた子供たちは、クロアチア語で読み書きと賛美歌を学んだ。19 世紀後半になるとハンガリー政府が国民教育に力を入れはじめ、 1879 年の学校法で、すべての学校でのハンガリー語教育が義務づけれた。しかし 1900 年の国勢調査でハンガリー国民の 40%がハンガリー語を満足に知らないことが明らかとなり、とりわけ、ドイツ語話者やクロアチア語話者の住むブルゲンラント一帯では、その割合は 80%を超えたとされるなど、その実質的効果は疑わしいものだった。それぞれの地区の教会が学校となり、クロアチア人の多い地区ではクロアチア語もしくはクロアチア語とドイツ語の併用によって授業が行われる、という状況は事実上、1938 年にオーストリアがナチス・ドイツに併合され、学校でのクロアチア語の使用が禁止されるまで継続した。

現在の学校教育は、1994 年に定められた少数民族学校法に基づいて実施され、日本の小学校 1～4 年次に該当する国民学校(Volksschule)では、クロアチア語とドイツ語のバイリンガル授業が、また 5～8 年次の本科学校(Hauptschule)では授業におけるクロアチア語の使用もしくは学科としてのクロアチア語の学習が、認められている。これに先立つ時代には、1937 年に制定された学校法が戦後も適応され、国民学校でのバイリンガル授業はクロアチア人の児童が多数を占める地区でのみ、しかしそうした地区では義務的に行われた。これに対して新しい制度では、ブルゲンラント州内のどこであれ、地区内に最低 7 名の希望者がある場合、バイリンガルのクラスを設ける

ように変更された。事実、クロアチア人の居住地でない地区で現在バイリンガル授業を実施している学校が 1 校ある。同時にしかしこの制度では、親あるいは子供が中途でバイリンガルクラスを辞めてドイツ語モノリンガルのクラスに転入する自由が認められている、バイリンガルクラスの設置に最低数 7 名の参加という下限を設けている、などの問題点がある。とくに後者は、少数者のための教育でありながら、一定数に満たないと教育が行われないという、少数言語教育の根本的な矛盾を示す問題であるといえるだろう。また、クロアチア語が授業言語として用いられるのは実質、国民学校すなわち基礎教育の最初の 4 年間のみで、それ以降の教育段階では、教科として週に 3～4 時間程度クロアチア語が教えられるだけという現状も懸念される問題である。初期段階でバイリンガル教育を行っても、上の学校で教育が継続されなければ、初期段階での学習そのものの動機付けが失われ、またクロアチア語の社会機能の拡張を図ることも難しいからである。

表 2 は 2006/2007 年度の国民学校ならびに本科学校でのクロアチア語授業の参加者の数である。「授業言語」とあるのは、クロアチア語が授業言語として用いられているバイリンガルクラス、「科目」は、クロアチア語が学科として教えられているクラスの意味である。バイリンガルクラスでは、ドイツ語モノリンガルのクラスと同じ授業内容を、教師がクロアチア語とドイツ語を交互に入れ替えながら授業が行われる。

【表 2　2006/2007 年度クロアチア語授業参加者の数】[5]

学校	区分	児童数
国民学校	授業言語	1290
(1～4 年次)	科目	175
本科学校	授業言語	50
(5～8 年次)	科目	301

クロアチア人は、移住とともに、本国クロアチアで用いていた教会スラヴ語とよばれる古い文語の伝統を持ち込んだが、これは日常用いられる言語とはかなり隔たりのある言語であった。18 世紀以降、学校教育が広まり、また文学やさまざまな世俗の文書が書かれるようになる中で、かれらの日常的な言語をもとに一定の書き言葉のパターンが出来上がった。それが基盤となって、クロアチア本国の標準クロアチア語の語彙を取り入れた標準ブルゲンラント・クロアチア語が形成され、今日、学校の授業や ORF(オーストリア放送)の民族語放送で用いられている。冒頭で短く説明したように、この言語はクロアチア本国の標準語とは異なる特徴をもつ。その違いは、もともとの方言差と、ブルゲンラント・クロアチア語が祖国から離れてのち独自に変化した結果から生じるもので、前者の代表的な例は、疑問代名詞「何」という語に、標準クロアチア語では「シト(što)」を用いるが、標準ブルゲンラント・クロアチア語では「チャ(ča) 」を用いる、というものである。このように、クロアチアでは地域的方言に含まれる要素がブルゲンラントでは標準的な言い方になるケースがしばしばある。ブルゲンラント固有の特徴としては、ドイツ語やハンガリー語の借用語彙がある、母音や子音の発音にクロアチア語にはない調音特徴が含まれる、といったことがあげ

[5] ブルゲンラント教育省統計による：http://www.lsr-bgld.gv.at/Pub_download/index.htm

られる。実際には、クロアチア語とブルゲンラント・クロアチア語の標準語間の差異は、日常会話で相互理解に支障を生じるほどのものではなく、私自身 ORF の放送内容はまず理解できるし、アイゼンシュタットで何人かのブルゲンラント・クロアチア人と会話をし、そのさい私は標準クロアチア語で、相手は標準ブルゲンラント・クロアチア語で話してとくに支障はなかった程度である。それでも、発音、アクセント、使用語彙、また名詞の格語尾などの文法事項に歴然とした差があり、そのため学校では、カリキュラムの違いという理由を除いても、クロアチアの教科書をそのまま使用することはできず、ブルゲンラント・クロアチア語で書かれた独自の教科書を使用している。

3.3.　文化活動について。

ブルゲンラント・クロアチア人社会には、さまざまな文化的組織がある。もっとも古いものは 1929 年に設立されたクロアチア文化協会で、オーストリア社会の中でクロアチア人としてのアイデンティティを保つことを目的にアイゼンシュタットで結成され、今日も活動を続けている。比較的最近では、クロアチア文化・文書センターがクロアチア関係の文書の収集や出版、あるいは成人に対するクロアチア語教育の場を提供するなどの活動を行っている。ブルゲンラント・クロアチア学術研究所は、クロアチア人の歴史や文化を学術面から研究するとともに、語彙の整備など、ブルゲンラント・クロアチア語の言語計画を担う言語委員会の役割もはたしている。

また、首都ウィーンにも約 7000 人ほどのブルゲンラント・クロアチア人がいる。これは 20 世紀のさまざまな時代に職を求めてブルゲンラントからウィーンに移り住んだ人々で、こうしたクロアチア人の交流の場となっているのが、ブルゲンラント・クロアチアセンターである。センターはウィーンの中心地近くにある大きな建物の 1 階と 2 階のスペースを借り、2 名の専任スタッフが中心になって、展覧会や出版記念会、朗読会、討論会、演奏会などの文化活動を月に 6〜7 回行うほか、クロアチア語を用いた幼稚園や、クロアチア語学級を開くなど、精力的に活動している。ウィーンには、ブルゲンラント州内のように公的に制度化されたクロアチア語教育機関がないため、このセンターがブルゲンラント・クロアチア語を学習できる唯一の民間機関ともなっている。

クロアチア人にかかわるこれらの組織には、他の少数民族と同様、連邦政府ならびに州政府から、少数民族保護のための予算措置によって一定の補助金が交付されている。しかしながら、ある関係者によれば、そうした補助金は、光熱費や施設使用料、最小の経費と人件費を補充するのみで、多くの活動が寄附やボランティアによって支えられているのだという。

こうした民族組織の活動はそれぞれが意義ある役割を担っているが、それと同時に、あるいはそれ以上に、人々の民族意識の維持に重要であると思われるのが、ブルゲンラント州内のクロアチア人の村のほとんどに結成されている、タンブリツァとよばれる民族音楽のグループである。タンブリツァとはもともと、古くからクロアチアで用いられている、マンドリンの首の部分を長くしたような形の弦楽器の名称で、マケドニアやブルガリアではタンブラ、ボスニアではまたシャルギヤなどとよばれる楽器と同系統のものである。この弦楽器に、コントラバスやギターのような形をした数種類の弦楽器を合わせ、5〜6 人から数十人が編成を組んで演奏しながら歌うのがタンブリツァである。クロアチア各地で行われていたものを 20 世紀のはじめにブルゲンラ

ント・クロアチア人がまねて始めたものであるため、ブルゲンラントでの歴史は浅いが、今ではタンブリツァのグループに加わり、そこで演奏し歌を歌うことが、クロアチア人としての意識を形作る重要な要素となっている。かれらが集まってタンブリツァの練習をしたり演奏をする様子を見ると、人が集うことの意味、とりわけ少数者集団にとって、一つの場所に集い、コミュニケーションを交わすこと、同じ旋律を奏でるために練習し協力することが、アイデンティディの維持にいかに重要にかかわるかがを学ぶ思いである。

2006 年の夏から秋にかけて、ブルゲンラント州各地では、1956 年のハンガリー革命から 50 年を経ての記念式典が行われた。ORF の民族語放送でも、クロアチア人の村で行われた記念行事の様子が放送され、その中で、当時 18 歳だったという女性が、ハンガリー側に住むいとこたちが自分たちを頼って逃げてきたという思い出話を語っているのが、とくに印象的であった。20 世紀の最後におとずれた東欧自由化によって、東と西の体制上の壁は取り払われ、かつて親戚同士をも隔てていた国境を越えて、人々は自由に行き来するようになった。2004 年には、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーが欧州連合に加盟し、旧ハプスブルク帝国の領域が再び、一つの連続体を形成することになった。こうした中で、オーストリア、ハンガリー、スロヴァキア 3 国のブルゲンラント・クロアチア人の交流活動も、盛んに行われている。今のところそれは、それぞれのタンブリツァのグループにクロアチア本国のタンブリツァ・グループが加わったフォークフェスティヴァルや、子供たちの合同キャンプのような、いわばお祭り的なものであるが、少数民族の最大の問題は、当然のことながら、数が少ないことである。人々がまず、何かの活動を通じて連帯すること—現時点ではそれだけでも、意義あることといえるだろう。

4. 未来へむけて—拡大する東欧と少数民族。

ヨーロッパ各国にはかならず、少数民族とよばれる集団がいる。どのような集団にとってもそうだが、とりわけ少数集団にとって、固有の言語の維持が大切であることは、本稿ですでに述べたとおりである。そして、大言語が支配する社会の中で少数言語が維持されるためには、何らかの制度的な保障、法的措置が必要である。それは場合によっては、国家間の協定を必要とするものにすらなるだろう。言語の行使—どの言語を使用し、また次の世代に伝えるか—は究極的には個人の問題であるとして、国家が母語の使用や言語選択の権利を基本的人権として認めているだけでは、不十分なのである。1990 年以後の東欧の民主化、ソ連邦やユーゴ連邦の崩壊は、あらたな欧州全体の安全保障体制と国家間の協力関係を必要とする時代を生み出した。多くの少数言語・少数民族集団を抱える中・東欧、ソ連が、鉄のカーテンを開き西に向かって拡大したことによって、西側もあらためて、それまで自国が抱えていた少数言語、少数民族の問題を、欧州全体の安定に連なる問題としてつきつけられることになった。また、ユーゴスラヴィアの崩壊は、本来、経済破綻と共産主義の失敗、そしてユーゴ連邦軍の体質に起因するものであったが、80 年代末の混乱した状況を自己の政治的野心の実現に利用しようとした各国の指導者たちが民族主義的な政策をとったために、たちまち民族抗争の様相を呈し始めた。その悲惨な紛争は結果として、あらためて欧州に、民族問題というものを自らの課題として取り組む機会を与えたともいえるだろう。1990 年代以後とくに、欧州で少数民族・少数言語の問題がクローズアップ

され、またそれをうけて少数言語集団の活動が活発化してきたことも、こうした社会の変化の中での当然の流れとみることができる。

このような状況に鑑みると、欧州における文化の多様性の維持や少数者の権利擁護を目的とする国際機関である欧州評議会(Council of Europe)が 1992 年に「地域言語もしくは少数言語のための欧州憲章」[6]を開放したことは、むろん、それに先立つ長い年月をかけて準備された結果であるとはいえ、まさに満を持しての出航という感さえある出来事であった。これは欧州各地で伝統的に使用されてきた地域的言語や少数民族の言語を、欧州の文化的財産として認めその保護と育成にあたろうという主旨で作成されたもので、教育や司法、行政サービス、経済活動、文化活動、メディア、国家間協力など、社会活動の諸領域での地域言語・少数言語の使用を推奨するための措置が合計 98 の項目で定められている。締約国はそうした措置を、それぞれの国内法に合わせ、あるいは何らかの形で法制度に取り入れて、実施する責任を負うことになる。欧州評議会加盟国の中で、2006 年時点で憲章の批准，発効に至っている国は約 3 分の 1 の 18 カ国で、オーストリアは 2001 年に批准・発効、またハンガリーは 1995 年に批准し 98 年から発効している。

この憲章批准にさいして、ブルゲンラント・クロアチア語は、スロヴェニア語、ハンガリー語、ロマ語、チェコ語、スロヴァキア語とともに、オーストリアにおける保護対象言語の一つと定められた。ただしオーストリアの場合、定められた措置は、対象となる言語を話す住民が伝統的に居住する州が実施責任を負う。したがって、ブルゲンラント・クロアチア語については、ブルゲンラント州政府が、またスロヴェニア語についてはケルンテン州、シュタイヤーマルク州政府が担当する、といった形になる。ブルゲンラント州における保護対象言語は、クロアチア語のほか、ハンガリー語とロマ語である。

憲章はそれ自体が何らかの強制力をもつものではなく、締約国が自ら実施すると定めた措置を遂行していなくとも、欧州評議会から何らかの罰則が課されるわけでもない。またブルゲンラント・クロアチア語のように、憲法などですでに一定の地位が確立されており、学校教育やメディア活動において長年の実績がある言語に関しては、憲章の実質的な効果は、社会全体にも、また受益者であるはずの少数言語話者にも、さほど認知されないかもしれない。それでも、少数言語の使用者にとって憲章は、締約国が定めた措置を実施していない、あるいは十分実施されていないと考えられる場合、その違法性を裁判に訴える根拠を与えるものとなる。したがって間接的な法的意義は十分見出されるといえるだろう。またそれ以上に重要なこととして、憲章が定める監視制度がある。憲章は締約国に、3 年ごとに憲章の実施状況を報告書にまとめて欧州評議会に提出する義務を課している。この報告書をうけて評議会の定める専門委員会が現地調査を含めた吟味を行い、評価を与える。評議会は専門委員会の評価をもとに、締約国に改善などの助言をする。この 3 年を一循環とするという監視制度、とくに専門委員会の現地での聞き取り調査を含む評価は、ともすれば発言力がないこと

---

[6] 詳細はhttp://www.coe.int/T/E/Legal_Affairs/Local_and_regional_Democracy/Regional_or_Minority_languages/

で不利益を被ることの多い少数言語にとって、自分たちが抱える問題を国際的な場に提示する機会となるものである。オーストリアは 2003 年に第 1 回目の報告書を提出し、それに対する専門委員会の評価書が 2004 年に出された。それによれば、ブルゲンラント・クロアチア語に対する措置はおおむね遂行されているが、バイリンガル教育が実際にはすべてのバイリンガル学級で遂行されていないこと、裁判においてクロアチア語話者が差別を恐れてクロアチア語を使用できない状況があること、行政サービスの運用面でクロアチア語の使用が十分に認められていないことなどが指摘されている。2006 年に提出されるはずの、オーストリアによる 2 期目の報告書はまだ公表されていない。指摘された問題点に関して、どのような取り組みがなされているかが注目される。

グローバル化とよばれ、社会の諸局面がめまぐるしく変化する時代、情報通信の手段が大きく変わっていく今後において、この欧州憲章のような、少数言語を保護するための国家を超えた枠組みはますます重要になることだろう。それと同時に、少数言語集団自らが、自分たちの言語の価値を大言語に対してアピールしていく必要もある。少数言語、すなわちここではブルゲンラント・クロアチア語の歴史的正当性や文化的価値のみならず、実用的効果を大言語話者に訴えていくこと—ブルゲンラント・クロアチア語の知識があれば、クロアチア語はもちろん、他のスラヴ語にもすぐになじむことができる、チェコやスロヴァキアとの経済交流や、旧ユーゴ地域との将来的な関係強化において、スラヴ語の知識は今後有益である、クロアチア語ができれば就職にも有利である、などといった、いわば言葉の経済的効果をちらつかせることで、この言語への関心を広く社会に呼びおこすことである。「数は力なり」という発想は場合によってはきわめて危険なものとなるが、少数集団に関する限り、これは至上命題である。ドイツ語話者の間にブルゲンラント・クロアチア語の学習への関心が高まれば、それは学校教育の充実や、社会のさまざまな面での言語使用の可能性へと道を開くことになるだろう。一部の地域では事実、ドイツ語話者の親が子供をクロアチア語の授業に参加させるというケースも見られる。こうした事例を地道に増やし、言語使用の底辺を少しでも広げていくこと、これが今後の大きな課題の一つであろう。

5. おわりに。

クロアチア政府はブルゲンラント・クロアチア人を、自分たちの一部、あるいは延長という言葉で表し、クロアチアの人々はブルゲンラント・クロアチア語を、クロアチア語の「方言」とよぶ。それはもちろん、歴史的に間違ってはいない。しかしブルゲンラント・クロアチア人の意識の中で、自分たちとクロアチアの関係はそのようにとらえられてはいないように見える。祖国から離れて 400 年以上別々の歴史を歩んできたブルゲンラント・クロアチア人たちにとって、クロアチアは遠い祖国ではあっても、今の祖国ではない。かれらは、本来異国であるオーストリア、あるいはハンガリーやスロヴァキアの地に融合しながら独自のアイデンティティと言語を保持することによって、自分たちの小さな祖国をそこに築いてきたのである。クロアチア本国との文化交流やクロアチアからの援助はむろん重要なものとみなされているが、それは、かれら自身のアイデンティティを守るための支えとして重要なのであり、クロアチア本国と一体化したいというような願いとはほど遠いものである。

言語の維持という観点からいえば、かれらの将来は正直にいって、決して明るく

ない。ある 50 代のブルゲンラント・クロアチア人の「僕らが生きている間は大丈夫だろうけれど、その後はどうかな」という言葉は、残念なことにかれらの言語状況をよく反映している。いかに法的措置がとられようと、国際環境が変化しようと、言語使用当事者が努力し、工夫して次の世代に言葉を伝えていかない限り、どうしようもない問題なのである。この地に住むクロアチア人たちが自分たちの言語を失うとき、かれらは自分たちの社会を、つまり長い年月をかけて築き守ってきた、異国の中の「祖国」を失うことになるのだろう。西欧と東欧のまさに境界の上で歴史の中を静かに生き抜いてきたブルゲンラント・クロアチア人社会にそのような日が到来することがないようにと、願うのみである。そしてこの願いは、東欧のみならず、世界に数多くいる少数言語集団が消滅することがないように、地上の多種多様な言語文化が守られていくように、という一人の言語学者としての、多少大仰な願いに通じるのである。